

## アレクサンドラ・コロンタイによる〈新しい女〉像及び「水一杯理論」 —小説『赤い恋』、『三代の恋』、『偉大な恋』を中心に

ナザランカ カチャリーナ

### Концепция «новой женщины» Александры Коллонтай и теория «стакана воды» — основываясь на произведениях «Василиса Малыгина», «Любовь трёх поколений» и «Большая любовь»

Назаренко Екатерина

#### Резюме

В данной работе говорится об Александре Коллонтай, её концепции «новой женщины», а также о теории «стакана воды» и её отношении к этой теории. Статья состоит из трёх частей. В первой рассматривается образ «новой женщины» и, в частности, образ нигилистки в литературе второй половины 19 века, приводятся сведения о движении феминизма и нигилизма, а также о состоянии женского вопроса в то время. Во второй части даётся краткий обзор деятельности А. Коллонтай и возглавляемого ею Женотдела, её вклада в эмансипацию русских женщин после революции и её осмысления понятия «новая женщина» на основании одноимённой статьи, перечисляются качества, характерные, по мнению Коллонтай, для «новой женщины». В третьей главе даётся краткий анализ трёх произведений Коллонтай: «Василиса Малыгина», «Любовь трёх поколений» и «Большая любовь». На примере образов героинь этих произведений и с помощью цитат из них раскрывается понимание Коллонтай отношений между полами и понятий, связанных с ними («любовь-игра», «любовь-товарищество» и т. д.). Во многих странах, включая Японию и даже Россию, сложилось ошибочное мнение о том, что Коллонтай была приверженцем теории «стакана воды», пропагандируя «свободную любовь», а точнее, сексуальные отношения, освобождённые от ответственности и какого-либо чувства к партнёру, кроме инстинкта размножения. Автор статьи рассуждает о том, почему это мнение скорее ошибочно, приводя в доказательство цитаты из произведений и статей Коллонтай.



## 目次

1. 19世紀後半のロシア文学における〈新しい女〉
2. アレクサンドラ・コロンタイの活躍及び〈新しい女〉論
3. コロンタイの小説における新しい女性像及び恋愛論

ロシアの10月革命によって地下から公に姿を現し大活躍したアレクサンドラ・コロンタイはロシアで、〈新しい女〉の概念を導入したことで有名になり、彼女自身も時代で最も卓越した新しい女になったと言える。コロンタイはマルクス主義の活動家の1人であり、共産党によって成り立つ「明るい未来」を熱心に信じていたが、彼女の小説が誤認を招き、日本を含め世界中で自由恋愛（というより、自由性交渉）を説く「水一杯理論」に関連付けられたため、皮肉なことにマルクス主義のアンチプロパガンダのようなものになった。本稿では、その経緯や理由に触れつつ、コロンタイの恋愛観及び〈新しい女〉の概念について論じたいが、まず、コロンタイによる新しい女性像の先行者、19世紀後半ロシア文学における〈新しい女〉像から始めたい。

## 1. 19世紀後半のロシア文学における〈新しい女〉

ロシアの文学における〈新しい女〉のイメージは、おそらく19世紀の60年代、ニコライ・チェルヌイシェフスキーの小説『何をなすべきか』（1863年）のヴェーラ像、そして他の作者が描いたニヒリストの女性像から始まるだろう。それ以前も「女性解放」はロシア社会において話題として提起されることがあった。1830年代から「心の自由」を称えていたフランスの女性作家ジョルジュ・サンドの小説がロシアの知識人に影響を与えていた。ジョルジュ・サンドのヒロインたちが一義的に〈新しい女〉であるかどうかはさておき、少なくとも恋愛に関して彼女たちは自由主義的な姿勢を

とり、離婚を受け入れない当時のブルジョワジー道徳に疑いをさしはさんでいた。男女を問わず当時のロシア人がジョルジュ・サンドの小説を愛読していた。その小説は恋愛や離婚の自由について論じるきっかけになり、女性解放の先駆者であるアレクサンドル・ゲルツェンの1846年の『誰の罪か』を触発したとされている。

『誰の罪か』や『何をなすべきか』というリベラルな作者の作品から、保守的な思想を持っていたレフ・トルストイの『アンナ・カレーニナ』まで、当時のロシアでは離婚の問題が頻繁に提起されるテーマになった。既婚の女性が夫以外の人と恋に落ち、それに悩んでいるというのが、そのような小説の基本的なプロットである。『何をなすべきか』の楽観的な成り行きと異なり、『アンナ・カレーニナ』の場合、それは自殺という悲劇的な結末に至る。トルストイを含め、当時の知識人の多くが離婚を受け入れていなかったことは、おそらく多くの急進的な若者が賛美していた「自由恋愛」、言い換えればニヒリストに関連付けられている「乱交」に対する彼らの恐れに関係していた。

60年代のロシアの女性解放運動にとって、ニコライ・チェルヌイシェフスキーの小説『何をなすべきか』（1863年）は最も重要な作品の1つになった。刑務所でチェルヌイシェフスキーによって書かれ、検閲者の間違いで出版されたこの小説はロシア社会でセンセーションを巻き起こし、出版されてから1917年10月革命までの革命の活動家にとってある種の「聖書」になったと言える。主人公ヴェーラのイメージは、コロンタイに「現実の女性のタイプに見えない」と批判されたが、ロシアの急進的な若者にとってのこの長編の偉大な役割は彼女も認めていた。確かに、ヴェーラの空想的社会主義はときおり「明るい未来」についての子供の夢を思わせる。ただし、とてもナイーブな思想を持ち合わせていた彼女の話によって、女性の教育や労働、現代の結婚や恋愛の自由などという深刻なテーマが当時のロシアにとって極めて率直に提起された。

当時、女性は中等教育を受けていたが、1860年代まで大学に入学することも、聴講することも許されて

いなかった。良妻賢母を育成するために、女性教育は家事や社会的スキルに焦点を当てていた。そうした理由から、男性と同じ仕事をするのは不可能になり、経済的に親や親戚、もしくは夫に依存する他に道が少なかった。女性の経済的自立については、マリヤ・ヴェルナーツカヤが初めて公に話したとされている<sup>2</sup>。教授である夫は彼女に経済学を教え、夫婦が一緒に出版していた「経済指標」誌（«Экономический индекс»）（1857～1861年）にマリヤは女性労働についてなどの記事を投稿していた。農奴解放令が出たことはロシアの産業化を促進した一方、農奴に長年頼ってきた貴族の経済力を脅かした。女性を含め労働力の需要が高まり、女性の教育を巡る議論や活動も一層活発になった。

ロシアのフェミニストたちは参政権や法的権利よりも、まず女性が男性と同等の教育を受ける権利の獲得に尽力した。実際、「フェミニスト」と名乗ってはいなかったが、女性の教育権利、労働権利のために活動していた貴族の女性がいた。その中に、アンナ・フィロソフオヴァ、マリヤ・トルブニコヴァ、ナデジダ・スターソヴァの名前を挙げることができる。彼女たちの努力は「貴族の慈善」としてより急進的なニヒリストやナロードニキに批判されていたが、その努力の結果、女性労働を支える「安いアパートの会」や「女性翻訳者の会」が生まれ、長い間期待されていた女子の高等教育機関、「ベストウージェフコース」が1878年に開かれた。

19世紀のロシアでは女性が就ける職は限られていたが、存在はしていた。ただ、中流階級及び上流階級の女性にとっては、就職は一般的に「恥ずかしい」と受けとれられていた。女性の使命は家族であるというのが、少数の例外を除き当時の一般常識だった。ニコライ・ストラホフをはじめとするスラブ主義者の知識人もその見方をもち、家族を作らない女性の運命は社会から「失敗」と見なされていた。他方、嫁入りしてから、避妊の知識のなさ、中絶の禁止のために多忙な子育てや家事以外の活動には時間がたいていなかった。

そうした社会偏見や伝統を破ろうとしたのは、ニヒリズム運動の代表者たちだった。ニヒリズム（虚無主義）は欧化主義を基に1860年代にロシアで生まれたが、もともとの欧化主義より一層急進的だった。その名前からもわかるように、ニヒリストたちは社会の常識、伝統やしきたりを拒絶すること、他に自然科学への関心、女性解放及び革命運動に参加することを特徴としていた。「ニヒリスト」という名は罵り言葉になったほど、彼らは社会に恐れられ、軽蔑されていた。当時のロシア文学においても「ニヒリスト」は極めて否定的なイメージを与えられていた。チェルヌイシェフスキーを始め、欧化主義者の知識人は概して女性解放を支持していた一方、トルストイやドストエフスキーなど、最も知られている19世紀のロシア人作家や思想家の多くはどちらかというと保守的な立場を取っており、自身の作品でニヒリストの代表者たちを極めてアイロニカルに描いていた。

文学においても、世論においても、ロシアの〈新しい女〉の一般的なイメージはメガネをかけることや短い髪形、清潔感のない衣装を含むだらしない外観、喫煙などがあった<sup>3</sup>。内的な特徴を挙げると、家族の概念や女性らしさを完全に拒絶し、乱交を含む墮落した生活を好む女として描かれていた。自立を求め、解放運動に参加することは、世間体の悪さなどのために妻及び母という伝統的な女性の役割を果たせないからという理論に根ざした世論だった。その一つの例はツルゲーネフの『父と子』（1861年）でうかがえる。虚無主義者クークシナの家と彼女自身は次のように描かれている：

彼らが入った室は客間というよりむしろ仕事部屋のようであった。書類や手紙やその多くは切っていない部厚なロシアの雑誌などが、あちらこちら据えた埃だらけのテーブルの上に散らばっていた。至るところに巻煙草の喫殻が投げ散らされてあった。皮張りの長椅子には一人の貴婦人が半ば身体を横にしていた。彼女はまだ若々しく、白っちゃけた頭髪をいくらか振り乱して、余り清潔とは言

われぬ絹の衣服を着て、短い両手には大きな腕輪を嵌め、頭にはレースの襟巻を被っていた。彼女は長椅子から起き上がって、黄味を帯びた狼の毛皮を付けた天鵝絨の外套を無造作に自分の肩に引っ掛けながら、「今日は、ヴィクトルさん。」と、気怠そうに呟いて、シートニコフの手を握った<sup>4</sup>。

「埃だらけ」、「巻煙草の喫殻が投げ散らされて」、「余り清潔とは言われぬ絹の衣服」というのは全て「だらしない恰好」、「墮落した生活」を急進的な女性のイメージに関連付けているところである。「切ってない部厚なロシアの雑誌」というのは、科学に関心を持っているかのように気取っているクークシナが、実際はそれを読んでいないということで、彼女の浅はかな性格を仄めかしている。

主人公のバザーロフもニヒリストであるが、彼でさえクークシナを含め、急進的な女をあざ笑っている。バザーロフこそ男女平等や女性解放の支持者であるはずだが、彼の言葉「僕の考えでは、女で自由思想を懐くような者は、碌な者ではない」(ロシア語の原稿では「碌な者ではない」の代わりに「уроды」、つまり「ブス」、「フリーク」というはるかに強い言葉が使われている)は極めてシニカルで、皮肉なことにニヒリストを批判する世論と同様である。

当然、特に20世紀に入ると、革命家や急進主義者が肯定的に描かれていた場合もあった。例えば、プロレタリア文学者マクシム・ゴーリキーの中編小説『母』(1906年)においては、虐げられた文盲の女性が理想のために犠牲になるほど熱心な革命家へ転身したことが描かれている。ただ、19世紀後半ロシアの一流の作家たちが急進主義者を多くの場合受け入れていなかったことは確かである。

## 2. アレクサンドラ・コロンタイの活躍及び〈新しい女〉論

アレクサンドラ・コロンタイはブルジョワの家庭に生まれたが、ナロードニキの思想を持っていた家庭教

師の影響を子供のころから受け、若いころから労働者解放運動に興味を示していた。彼女自身の言葉によると、彼女の人生には二つの主な目的があり、一つ目は女性の解放で、二つ目は資本主義国家の帝国主義政策との戦いだった<sup>6</sup>。彼女は労働者についての記事を多数投稿していた一方、女性の役割についての探求も絶えず行っていた。その中でも、小説(『三代の恋』、『姉妹』など)、記事やエッセイ(『社会と母性』、『恋愛と新道徳』)といった形で社会や労働、家族や母性、恋愛に関する自身の社会主義的思想を表明していた。ウラジーミル・レーニンと親しかったコロンタイは、革命後政治や社会に様々な形で関わっていた。彼女はヨーロッパ初の女性閣僚(人民委員)になり、世界で二人目の女性大使にもなった。大使としてノルウェー、メキシコ、スウェーデンで活躍し、第二次世界大戦中フィンランドとソ連の平和条約締結を直接手掛けた。

1920年代に作られた女性政策機関「女性部」(«Женотдел»)では、一時期やはりコロンタイが部長として勤めていた。1926-27年に代表者60万人以上に到達した女性部は、「女性労働者」誌を出版するなど、ソビエト連邦全国で社会主義のプロパガンダを行い、女性の生活状況を改善するため、非識字者の根絶に力を入れ、平等性に基づく夫婦関係、教育、労働法について女性を指導するという教育活動を行っていた。他に、ストリートチルドレンの世話、学校や職場の審査、立法活動といった形で社会において積極的に効果的な活躍をしていた。しかし、スターリン政権に代わってから、女性部の活動は段々縮小させられていった。

1913年にコロンタイは『新しい女』という論文を発表し、当時の文学作品のヒロインを例として取りあげながら、新しい女を「独身女性」と言い換えている。その新しいタイプの女性を次のように描写している：

(...) это какой-то новый (...) тип героинь, незнакомый ранее, героинь с самостоятельными запросами на жизнь, героинь, утверждающих свою личность, героинь, протестующих против всестороннего



порабощения женщины в государстве, в семье, в обществе, героинь, борющихся за свои права, как представительницы пола. «Холостые женщины» – так все чаще и чаще определяют этот тип. «Die Junggesellinnen»...

Основным женским типом близкого прошлого была «жена», женщина-резонатор, придаток мужчины, его дополнение. Холостая женщина менее всего «резонатор», она перестала быть простым отражением мужчины. Холостая женщина обладает самооценным внутренним миром, живет интересами общечеловека, она внешне независима и внутренне самостоятельна<sup>7</sup>.

(…) これは今まで知られていなかった、新しいタイプのヒロインである。人生に対する自立の要求を持っているヒロイン、自身の自我を確立しているヒロイン、国家や家族、社会における女性の多岐にわたる奴隷化に抵抗し、性の代表者として自身の権利のために戦っているヒロインなのである。このタイプは「独身女性」として定義されることがますます増えている。「独身女性」…

近い過去の主な女性のタイプは「妻」であり、「共鳴する女」、男性の付録、彼の補足だった。独身女性は「共鳴する女」とはかけ離れており、男性を単に反映するものではなくなった。独身女性は価値のある内心世界を持ち、一般的な人間の関心を持って生きている。彼女は外的にも自立しており、内的にも自立している<sup>8</sup>。

ここで「独身女性」というのは、実際の婚姻のステータスに関係なく、女性の精神的な自立を指していると考えられる。他に新しい女はどのような特徴を持っているべきとされるか、同じ記事から簡潔にリストアップする：

- ① 感情性の代わりに内部規律を持つこと
- ② 嫉妬や疑い、独占欲の代わりに感情の自由を認めること、恋のライバルを優しく扱うこと、復讐しないこと
- ③ 男性に対するより高い要求を持ちながら、独裁を容認しないこと、自我の尊敬を求めること。金銭的支援のなさや浮気を容認できるが、自我に対する油断を許さないこと
- ④ 女性として愛されるより、個人として、友達として愛されるのを重視すること
- ⑤ 自立を大事にしながら、結婚を求めないこと
- ⑥ 人生の意味を恋愛ではなく、自分の好きな仕事（社会思想、科学、職業、創造）に見出すこと
- ⑦ 性道徳に関する二重規範に反対すること、性的純度を重視しないこと、肉体関係を罪悪感なしで持つこと。

この記事で表現されている新しい女の特徴は、コロンタイの小説のヒロインによって裏付けられている。本稿で扱う『赤い恋』、『三代の恋』、『偉大な恋』は、〈新しい女〉として女性の成長、ジェンダー偏見を破ること、自我を確立することを鮮やかに描いている。現実においては、コロンタイにとって、このような「独身女性」かつ〈新しい女〉の例はドイツのマルクス主義の活動家ローザ・ルクセンブルクだったが<sup>9</sup>、コロンタイ自身もソ連国家が生まれたばかりの時代において最も卓越した〈新しい女〉になったのではなかろうか。

コロンタイが作った新しい女性像は、先行するニヒリストカ像と言うまでもなく大分異なる。コロンタイはそのような女性の外見にも、自然科学への関心や喫煙などの個人的な趣味にも触れていない。代わりに、『新しい女』で数回強調されている経済的及び精神的「自立」は最も重要なキーワードになっている。19世紀ロシアの場合、精神的な自立はともかく、経済的な自立を女性に求めるのはまだ無意味だった。言葉通りの〈新しい女〉が生まれるには、女性の労働環境を幅広く提供できる経済状況が不可欠な要因の一つであ

る。

19世紀のニヒリストカから継承した〈新しい女〉の特徴を挙げると、上記の②及び⑦項で挙げられている「感情の自由」及び「性関係の自由」、言い換えれば「自由恋愛」である。トルストイを含め、19世紀の保守主義者たちはそれを「乱交」として認識していたが、コロンタイを始めとするプロレタリアの性ドクトリンを説いていたロシアの共産主義者たちにとって、それは自分のパートナーを自分で選ぶ権利、様々な理由でその関係を終わらせる権利などであり、現代から見ると基本的人権を意味していた。これらと内戦中にソビエトの若者の間で普及した「水一杯理論」を区別しなければ、コロンタイの思想を正しく理解できないだろう。

冷静さを重んじる上記の思想に反して、コロンタイ自身の特質は感情的で衝動的だったようである。一貫性のなさがたびたび批判されることがあったのは、もしかするとそうした理由によるものかもしれない。恋愛に対する彼女の見解の紛らわしさは、当時から現代にいたるまで彼女の思想に対する誤解を招いた。『恋愛と新道徳』では、大きな力、崇拜すべきものとしてコロンタイが愛情を肯定することが見られるが、上記の『新しい女』では愛情は仕事より重要な位置を占めてはならず、重要な体力や時間を奪うものとして描かれている。また、『新しい女』では、男女の関係において性欲より友情が重要であることが説かれているが、『翼のあるエロスを解放せよ』（1923年）では、精神的な愛情とともにやはり「身体の引き付け」の重要性が強調されている。ただし、彼女の著作を貫いた概念の一つは、「愛情の多様性」の考えであり、これは誤解されやすい原因なのかもしれない。コロンタイの恋愛論及び彼女の文学作品で描かれた新しい女たちには次の項で触れたい。

### 3. コロンタイの小説における新しい女性像及び恋愛論

コロンタイの思想においては特に恋愛、エロスに関

する姿勢が特徴的である。上記のように、彼女は女性解放に生きがいを見出していた。女性解放及び女性史を扱う際には、男女関係を無視することができないと考えられる。人間の歴史上、女性はいくつ最近までは従属的地位を占めてきたため、男性の何らかの形の援助がなくては家族の外で活躍ができなかった。そうした観点から、女性史を扱うということは、男女関係史、ジェンダー史を出発点にすることであると、現在のフェミニストたちは認めている。従って、コロンタイのジェンダー関係に対する関心も決しておかしいことではないと判断できるが、彼女のその関心は男女を問わず共産党の仲間にも絶えず批判されていた。例えば、ポリナ・ヴィノグラドスカヤは1923年の批評では、エロスを巡るコロンタイの記事が当時の罵り言葉で言うところの「ブルジョワ的」<sup>10</sup>であると主張し、コロンタイ自身を「フェミニズムの屑を大分持っている共産主義者」<sup>11</sup>（«коммунистка с солидной долей феминистического хлама»）あるいは「20世紀のジョルジュ・サンド」<sup>12</sup>と呼んでいる。批判されたコロンタイの恋愛観を明確にしたい。

本稿で取り扱う『赤い恋』（原題『ワシリーサ・マルイギナ』）及び『三代の恋』は、1923年に出版された小説集『働き蜂の恋』に含められ、中編小説『偉大な恋』は1927年に発行された。日本語に『赤い恋』というタイトルで訳されたコロンタイの小説『ヴァシリーサ・マルイギナ』は日本で1927年にある種のセンセーションを起こし、「愛情の共産化」であるかのように紹介された<sup>13</sup>。同様に、『三代の恋』も、コロンタイが「水一杯理論」を説いているかのように大きく歪められ、社会主義の悪評を裏付けた。

「水一杯理論」というのは、「性的欲望や恋愛の満足は、一杯の水を飲むようなものだ」というもので、日本大百科全書『ニッポニカ』によると、「俗に『コロンタイズム』とよばれて世界に広まった」<sup>14</sup>とされている。労働者階級の性道徳は、革命以前も他の階級より緩かったのが、例えばゴーリキーの『母』でうかがえる。革命直後、内戦中のロシアではさらに結婚外の軽い付き合いが普及した。ブルジョワの古い道徳を脱出

しようとし、家族を否定することに至り、恋愛は生殖本能に過ぎないというシニカルな理論を自分の都合よく使っていた人も少なくなかった。確かに、マルクス及びエンゲルスはブルジョワ的な家族の終末を予想していたが、家族制度の完全な否定や乱交には既婚のレーニンに代表される共産党の指導者たちが反対していた。「自由恋愛」という概念のその悪用は、アナトリー・ルナチャルスキーの記事『生き方について—若者と「水一杯理論」』<sup>15</sup>で非難されている。実際、コロンタイ自身も『翼のあるエロスを解放せよ』では感情のない肉体関係を批判している。ただ、コロンタイの小説に軽い付き合いの支持者が度々登場するというのは、「水一杯理論」はコロンタイ自身の思想であるという受け入れ方を招いた理由の1つとして考えられる。

『赤い恋』でこのような姿勢を取っているのは、新しい女であるワシリーサ（愛称形ワーシャ）ではなく、彼女のパートナー、ヴァロージャである。ワシリーサと遠距離恋愛関係中、彼が看護婦と浮気したことはすぐ明るみに出たが、愛を誓いながら熱く謝ったヴァロージャは結局許される。ワシリーサは、コロンタイの確信に従い、嫉妬を抱くべきではないと考えながら、実際は恋人の不倫を忘れられない。彼の浮気を「水一杯理論」を使うことで正当化しようとしている：

結局、ヴァロージャにとって、あの女は「一杯のウオッカ」に過ぎない。「飲んでしまえば、すぐ忘れる」ものなのだと、ワーシャは思った……

ワーシャは、元のわが家へ帰って、直ちに仕事にとりかかった。あの時は、すべてまたもと通り、順調に運んでいるように思えた。が今ワーシャが思い出して見ると、すでにあの時から何か心にひっかかるものがあった。どこか、心の底の底がしめつけられる。それは、あのむっちりした唇の看護婦のことで、ヴァロージャに対して感ずる憤りとも、不信ともつかぬ気持ちだった……それでもワーシャは、ヴァロージャを熱愛している。(…)

悲しみを共に味わった今は、もっともっと心が近くなっている……にもかかわらず、この愛は、最早、明るい朝のような輝かしい喜びを、ワーシャにもたらしはしなかった。雲におおわれたように彼女の心は暗かった<sup>16</sup>。

このようにワシリーサは繰り返し、小説のほぼ最後まで恋人を責めたり、正当化したりしている。彼が一時的に彼女の家を訪問した際、家事を手伝っていた少女に手を出そうとした時や転勤先で愛人を作った時、ワシリーサは知らないふりをしながら、心の中で苦しんでいる。「嫉妬や疑い、独占欲の代わりに感情の自由を認めること」というコロンタイの原理は、ブルジョワでも、プロレタリアートでも、実際の人の感情とは矛盾していることに、彼女自身も気づいていたに相違ない。例えば、彼女自身の二人目の夫パーヴェル・ドイベンコの不倫に気づいた時、ワシリーサのように、コロンタイは傷つきながらも夫を何回も許したが、それでも結局夫婦の破壊を止められなかった。

新しい女であるコロンタイ及びその代弁者ワシリーサは自我に対する尊敬を求めているが、なぜ自身の女性性に対する尊敬を求めているのか。精神的な裏切りを重視しているが、肉体的な裏切りはなぜ許されるべきだと考えているのか。このような「体」と「精神」の対立はキリスト教的な考え方に似通っている。すなわち、ソ連時代の宗教の禁止にもかかわらず、その概念はロシア人のメンタリティーに潜んでいると推測できる。同様に、『赤い恋』の終わり方も、皮肉なことにキリスト教的である。ヴァロージャを受け入れることも、捨てることもなかなかできないワシリーサは長い間苦しみ、浮気相手ニーナを許し、彼女にヴァロージャを譲ることに解決を見出した。まさに『アンナ・カレーニナ』のアンナとその愛人ヴロンスキーを許すカレーニンのキリスト教的カタルシスを思い起こさせる。結局、「水一杯理論」という観念は、『赤い恋』における女性登場人物は全く関係がなく、ヴァロージャによってしか実行されていない。彼は未成年者を強姦しようとする元来内面的に腐敗した人間であるため、

彼の振る舞いを通してコロンタイが自身の姿勢を表す意図を持っていたとは考えられない。

コロンタイが「水一杯理論」を説いているという悪評の原因は特に『三代の恋』だった。この短編小説は、主人公オリガが語り手に母親マリヤ及び自身のラブ・ストーリーを話すという形を取りながら、老婆、母、娘という同じ家族の三世代の女性の恋愛道徳を呈示している。マリヤは軍人の夫と2人の息子という家族を持っていたが、彼女の世界観に近い医者との恋に落ち、不倫関係となる。その結果、家族を思い切って捨て、オリガの父親となる医者と一緒に暮らすことにした。その後、医者の浮気が発覚した時、マリヤはもう一度思い切って彼と別れたが、死ぬまで彼を愛していたとオリガは語る。つまり、一番年上のマリヤの恋愛観は、恋愛は家族より重要だが、同時に1人しか愛せない、浮気を許すことができないという考え方なのである。それはおそらく、コロンタイから見ると「ブルジョワ的な」愛情の捉え方なのであろう。

それにひきかえ、オリガは長年夫と既婚の愛人の両方と関係を持っていた。その事情にオリガは悩みながらも、愛する2人の中から1人を選ばなければならないという母親の主張を特に気にしなかった。2人に対する同時の恋愛を容認するオリガの道徳は、コロンタイ自身の「愛情の多様性」という思想を連想させる。オリガは結局その2人を愛せなくなり、彼らと縁を切り、20歳ほど年下の男性と同棲生活を始めた。このプロットはまたコロンタイと17歳年下のドイベンコとの関係を思い出させる。その一致を考慮すれば、コロンタイの思想がオリガではなく、娘のジェーニャの思想に関係づけられてきたのは整合性に欠くと言えよう。

ジェーニャの言葉によると、恋愛はあまりにも手間がかかるため、彼女はそれより仕事に従事し、同時に数人の男性と「自由恋愛」的な肉体関係を持つことにする。その内の一人は母親のパートナーである。それを知ったオリガは当然傷つけられたが、その気持ちは娘にも夫にも分からない。ジェーニャの意見では、性行為は思い入れが強すぎないほうが良く、簡単であり

ふれたことであるという。つまり、彼女のこの恋愛観こそがまさに「水一杯理論」なのである。彼女は自身の姿勢を次のように説明している：

(…)いわゆる肉欲なんてものは、はっきり言って、私がこの数ヶ月関係していた人たちと会う迄は、多分なかったのよ。今はもうこれも済んだことよ。でもあの人たちは気にいったわ。彼等の方も気に入っているって感じね……こんなことどれもとっても簡単だわ。後ぐされなんてないんですもの。ママはどうしてそんなに動揺するのか分からないわ。(…)お互いに好きな間は一緒にいて、嫌いになれば別れるだけよ。こんなことで誰にも損はないわ……損なのは墮胎のために二、三週間、仕事を中断しなきゃならないこと位よ<sup>17</sup>。

このような主張が、小説が出版された当時の読者にとって、如何にスキャンダラスで苦々しく響いたのか、想像がつく。それによってコロンタイも、共産主義も一般の人々に悪名高くなったのも不思議ではない。ただ、コロンタイの他の記事を読んでいると、ジェーニャはコロンタイの思想の代弁者ではないという結論に至るだろう。『翼のあるエロスを解放せよ』から例を挙げる。

Полигамия (многоженство), в которой не участвует чувство, может повлечь за собою ряд неблагоприятных, вредных последствий (раннее истощение организма, увеличение шансов на венерические заболевания в современных условиях и т.д.)<sup>18</sup>

感情を伴わない複婚（一夫多妻）は、有害で宜しくない結果（体の早期の疲労、現代の状況の下で性病の可能性を高めることなど）を引き起こす可能性がある<sup>19</sup>。

この記事で、コロンタイは感情のないエロス、つま



り純粋な性欲に基づいた肉体関係を批判している。プロレタリアートの恋愛の理想としては、「友情恋愛」(«любовь-товарищество»)を称えている。このような愛情は、パートナーに対してだけではなく、人々に対する一般的な愛情、「人間愛」のような形でも存在するべきとされており、キリスト教の「隣人愛」を思い起こさせる。

同じテーマで書かれた『恋愛と新道徳』(1914年)で、コロンタイはもう1つのタイプの愛情を提示している。それはいわゆる「遊戯恋愛」(«любовь-игра»)なのである。「偉大な恋」(«большая любовь»)は人間に頻繁に与えられておらず、「運命の稀な賜物」であるため、それを待っている内に、代わりに「遊戯恋愛」をすれば良いとコロンタイは主張している。「遊戯恋愛」は何なのかということを明確にするために記事から引用する。

Это не всепоглощающий Эрос с трагическим лицом, требующий полноты и безраздельности обладания, но и не грубый сексуализм, исчерпывающийся физиологическим актом... «Игра-любовь» требует большой тонкости душевной, внимательной чуткости и психологической наблюдательности и потому больше, чем «большая любовь», воспитывает и формирует человеческую душу<sup>20</sup>.

これは完全で無制限の占有を求め、悲劇的な顔をしており、心を奪うようなエロスなのではなく、生理的な行為に制限された雑なセクシュアリティでもない…「遊戯恋愛」は、繊細な魂やきめ細かい心配り、心理的な観察力を必要としているので、「偉大な恋」よりも人間の魂を教育し、成長させる<sup>21</sup>。

つまり、「遊戯恋愛」は「雑なセクシュアリティ」にも、「偉大な恋」にも対比されている。それは2つの極点の間にある感情なのであろう。もし同じ座標系に「友

情恋愛」が置かれたら、「遊戯恋愛」とどのような関係になるのか、不明確である。

恋愛に関連する上記のいくつかの概念の1つ「偉大な恋」は、コロンタイの小説の題名となった。『偉大な恋』は日本で『三代の恋』及び『赤い恋』ほどの反響を呼ばなかったようだが、欧米の研究者の間で、この小説のプロットの基に置かれている三角関係はウラジーミル・レーニン、彼の妻ナデジダ・クルプスカヤ、革命家イネッサ・アルマンドを描いているという仮説が普及し、この作品に対する関心が高かった。実際、この中編はコロンタイ自身の体験に基づいている<sup>22</sup>。

小説では、革命の活動家ナターシャと既婚の思想家セミョーン・セミョーノヴィッチ(愛称形はセーニャ)の不倫であるラブ・ストーリーがプロットになっている。『赤い恋』と同様に、恋に目がくらみ、自我を失いかけている女性の幻滅が描かれているため、『偉大な恋』というタイトルには皮肉が潜んでいる。ナターシャは、コロンタイ自身のように独占欲のない、気持ちの自由を尊敬しているヒロインであるため、既婚のセーニャの告白を喜びながら受け入れ、妻と別れる要求を一度もしない。思想家として尊敬するセーニャとの両想いだけでも幸せになれるというナターシャの思い込みは結局のところ現実的ではなかった。『赤い恋』のヴァシリサと違い、嫉妬をほとんど懷かないナターシャは、セーニャを愛せなくなった理由もヴァシリサと異なる。セーニャは彼女の気持ちを分かろうとせず、自分自身及び妻の気持ちしか考慮しない。ナターシャとの恋は彼にとっておそらく問題が多い現実から脱出する方法であり、ある意味で幻想なのである。

ナターシャも、セーニャとの恋愛に関して幻想を抱いている。もともと友情から始まった2人の関係は、「友情恋愛」であると、ナターシャは長い間信じている。恋人が彼女の本質を理解し、彼女の自我を受け入れていると、ナターシャは確信している。セーニャの幻想的な恋は彼女の求めている愛情から如何にかけ離れているかということに、ナターシャは最後に気づく。

ある町に逃げた2人は、皆の前で恋愛を隠し、妻に

発覚しないようにセーニャはナターシャにホテルを出ることさえ禁じている。ある日、セーニャは知り合いを訪問していた時病気にかかり、ナターシャに知らせもせず、数日間ホテルに戻らない。ホテルを出ることもできず、恋人と連絡も取れず、心配で眠れないナターシャはまさに地獄のような苦しみを味わっている。さらに、セーニャとの逢引のために借金を作り、数週間好きな仕事が全くできなくなったナターシャはストレスがたまっている。その気持ちにセーニャは全く理解を示そうとしない。

Каждое утро Наташа вставала с надеждой: сегодня Сеня посвятит ей день. Ну, не весь, хоть несколько спокойных часов, так, чтобы наладилась искренняя, душевная беседа, чтобы захотелось «раскрыть душу».

Но дни шли за днями, а часов беседы не выкраивалось. Были ласки, поцелуи, были шуточные разговоры за чаем, были ночные ласки, а беседы нет, бесед не складывалось. Наташа пробовала работать. Надо было заготовить статью к сроку. Но работа не спорилась, шла тягуче, вяло. (...) и удивляло, даже обижало, что Семен Семенович ни разу не осведомился: а как ее работа<sup>23</sup>.

セーニャが今日の1日を彼女に捧げてくれるという希望とともにナターシャは毎朝起きていた。たとえ1日中でなくても、誠実で心温まる会話ができるような、心を開きたくなるような、穏やかな数時間でも。

しかし、日々が過ぎていっても、会話の時間はなかなかできなかった。愛撫やキス、紅茶を飲みながらふざけた話、夜の愛撫もあったが、会話はできなかったのだ。ナターシャは仕事をした。締め切りまでに記事を準備する必要がある。で

も、仕事はなかなか進まず、低調でダラダラしていた。(…) セミョーン・セミョーノヴィッチが彼女の仕事の調子について一度も尋ねなかったことに驚いたり、怒ったりもした<sup>24</sup>。

ナターシャにとって、主な問題はコミュニケーション不足と、彼女の自我が考慮されない、尊敬されないことであろう。彼女は自分がセーニャの聞き手や味方であるように、彼にも同じ態度を期待している。しかし、彼はまじめな話をできるだけ避けようとし、疲労や妻の不健康などを常に言い訳にしている。結局のところ、彼にとってのナターシャの価値は、彼の「愛人」にすぎず、問題からの逃避、慰めに限られている。彼女の自我は彼にとって重要ではなく、彼女は単に恋人の役割だけを果たせば良い、彼によって作られたイメージの範囲内で、いつも明るく、陽気で彼を無条件に受け入れる恋人でいれば良いというのが彼の望みであろう。「友情恋愛」でも「遊戯恋愛」でもなく、セーニャの愛情は利己的で、性欲に基づいたイリュージョンにすぎない。それを悟ったナターシャは、彼に直接何も言わないが、幻想とともに愛情を失い、セーニャに恋人としてはもう今後会わないことに決心してから、好きな仕事や仲間が待っている町に帰る。

上記のように、いくつかの記事や三つの小説を取りあげることによって、コロンタイの「恋愛観」及び〈新しい女〉の概念に触れた。三つの小説のヒロインたちは、その性格や生活の事情は異なっているが、男尊女卑の旧世界から脱出しようとし、〈新しい女〉になろうとしているという根本的な特徴は同じである。『新しい女』という記事で挙げられているコロンタイ自身の原則通り、彼女たちは感情の自由を認めていること、男に自我の尊重を求めていること、金銭的支援を求めず自立を大事にしていること、「友情恋愛」を理想としていること、自身のセクシュアリティを受け入れながら、恋愛だけではなく、自分の好きな仕事に生きがいを見出そうとしていることがその特質なのである。出版された当時、日本を始め、コロンタイの多くの小説はセンセーショナルで断じて許容できないも

のとして受け入れられたが、現代から見るとそうである。コロнтаイは「水一杯理論」を称えていたという普及した解説を再検討する必要があると考えられる。

## 注

- 1 Коллонтай А. Новая мораль и рабочий класс. Новая женщина. М., 1919. С. 5.  
[[http://www.pseudology.org/Bolsheviki\\_lenintsy/Kollontay\\_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf](http://www.pseudology.org/Bolsheviki_lenintsy/Kollontay_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf)] 2017 年 10 月 27 日閲覧。以下、URL の最終閲覧日は全て同一である。
- 2 Stites, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978). P. 73.
- 3 Хорольская М.В. Образ «новой женщины» в России XIX-XXI вв. или Почему в России так сложно назвать себя феминисткой. 2014.  
[<http://genderpage.ru/?p=1453>]
- 4 ツルゲーネフ全集、第4巻『父と子』（昇曙夢訳）1937年、119頁。
- 5 同上、138頁。
- 6 Бреслав Е.Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974. С. 19.
- 7 Коллонтай А. Новая мораль и рабочий класс. Новая женщина. М. 1919. С. 5.  
[[http://www.pseudology.org/Bolsheviki\\_lenintsy/Kollontay\\_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf](http://www.pseudology.org/Bolsheviki_lenintsy/Kollontay_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf)]
- 8 翻訳は本稿の著者による。
- 9 Бреслав Е.Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974. С. 86.
- 10 Виноградская П. Вопросы морали, пола, быта и т. Коллонтай // Красная новь. 1923. № 6 (16). С.180.
- 11 同上、210頁。
- 12 同上、213頁。
- 13 杉山秀子『コロнтаイと日本』新樹社、2001年、10頁。
- 14 相賀徹夫『日本大百科全書（第9巻）』『コロнтаイ』小学館、1986年、669頁。
- 15 А.Луначарский. О быте. Молодежь и теория «стакана воды». Л., 1927 г.  
[<http://lunacharsky.newgod.su/lib/o-byte>]
- 16 コロнтаイ『働き蜂の恋』『赤い恋』（高山旭訳）現代思潮社、1969年、79頁。
- 17 コロнтаイ『働き蜂の恋』『三代の恋』（高山旭訳）現代思潮社、1969年、375頁。
- 18 Коллонтай А. Дорогу крылатому эросу! (Письмо к трудящейся молодежи) // Молодая гвардия.1923. № 3. С.111-124.  
[[http://az.lib.ru/k/kollontaj\\_a\\_m/text\\_0030.shtml](http://az.lib.ru/k/kollontaj_a_m/text_0030.shtml)]
- 19 翻訳は本稿の著者による。
- 20 Коллонтай А. Любовь и новая мораль. 1912.  
[[http://az.lib.ru/k/kollontaj\\_a\\_m/text\\_1912\\_lubov\\_i\\_novaya\\_moral.shtml](http://az.lib.ru/k/kollontaj_a_m/text_1912_lubov_i_novaya_moral.shtml)]
- 21 翻訳は本稿の著者による。
- 22 Stites, Richard. *Kollontai, Inessa, and Krupskaja: A Review of Recent Literature*. (Canadian-American Slavic Studies 9(1), 1975). Pp:84-92.
- 23 Коллонтай А. Свобода и любовь. Большая любовь. М., 2014. С. 225.
- 24 翻訳は本稿の著者による。

